G. アヨルザナ、L. ウルズィートゥグス詩選
現代の相聞歌　あるいは“アヨールとウルズィー”という名のダイアローグ

（訳）阿比留　美帆

現代のモンゴル文学を代表する詩人・作家であるG.アヨルザナとL.ウルズィートゥグスは、互いの著書の監修や文学選集の共同編集を行うなど、作家活動を行う上での重要なパートナーである。同時に二人は実生活のパートナーでもある。

アヨルザナとウルズィートゥグスが出会い、結婚した九十年代半ばは、彼らが本格的に作家活動をはじめた時期とも重なる。ポスト社会主義時代の新しい文学の在り方を模索する若者たちを中心としたムーブメントのなかで、アヨルザナはその先頭に立ち、舌鋒鋭い論客として注目を集め、様々な論争を巻き起こしたりもした[1]。一方、ウルズィートゥグスは、詩の朗読会や作家組織等と距離を置き、一見浮世離れしてみえるような孤高のスタイルを貫きつつ、繊細かつ大胆な表現方法を用いて内面を描く詩の世界を切り拓いた。

現在、常に新刊が待たれる人気作家としてモンゴル国で活躍する二人であるが、決して平坦ではなかったその道のりのなかで、一番の理解者として、同志として、家族として支えあってきた互いの存在はかけがえのないものであっただろう。彼らの詩のなかに、パートナーへの想いが綴られた作品が少なからず見られることからも、それがうかがえる。「現代の相聞歌」ともいえるこれらの詩群は、アヨルザナが作品の中で表現している通り、二人の間で交わされた“会話”のようでもある。

“アヨール”と“ウルズィー”。彼らは互いにそう呼び合う。稀有な才能をもった二人の詩人が出会い、詩のことばを通じてどんな会話を交わしてきたのか、数編を紹介したい。

---

[1] アヨルザナが登場した当時のモンゴル文学界における様々な論争の詳細については、拙論「モンゴル現代文学における“アヨルザナ”という現象（G.Ayurzanaの活動とその評価にみるモンゴル詩歌の現状及び今後の可能性）」（『モンゴル文学』2号, 2014, 日本モンゴル文学会）を参照。

「L（AST）　U（NIT）」

そしてまた訪れた心の波立ち
大地がぐらつくほどの懊悩
これが僕の最後の恋
詩で飾る最後の愚行

いいか、よく聞いてくれ

僕よりも強くきみを想う心臓が
一体だれの胸に鼓動するだろうか
もしいるとするなら
そいつの妻になればいい

僕の愚行に勝る賢明さが
一体だれの頭から生まれるだろうか
もしいるとするなら
そいつの言葉を信じればいい

いるはずなどないのだから！

その通りだということに気付いたなら
その手を、僕に差し出してくれ
そして恋する詩人の名をこの世界に
ひとつ加えてくれ、さもなくば消してくれ

G.アヨルザナ
1995.2.12[2]　詩集『時の瞬く間に』より

[2] 表題に込められたイニシアル文字から、「L・U」、つまりウルズィートゥグスへのメッセージとして書かれた詩であることが分かる。この詩が書かれた1995年、二人は一緒に暮らし始めた。

「無題」

わたしからあなたのことばが響き
わたしからあなたの匂いがただよい
わたしからあなたの愁いの味がする

ちいさな足を、私
あなたの足跡に重ねてあるき
歳月のはるか高みを
あなたの肩越しにみつめ
不可思議なこの現し世(うつしよ)の
秘密を解きあかしながら生きていくとき
ありふれたものなど何ひとつない・・・

あなたの瞳で太陽をみつめるようになり
あなたの鼓動で時を数えることおぼえ
あなたの愛によって
赦(ゆる)し　受け入れ　生きていく
わたしの宿業(ごう)をやさしくとかした
　はるか前世(さきせ)のなんたる縁(えにし)でしょう

L.ウルズィートゥグス
1998　詩集『天上の樹々』より

「無題」

－ L.Uに －

きみを描きたいとおもう
きみを描きたいとおもう、その度に
筆と絵具を交わらせる術をしらぬことを悔やむ

きみを永遠のものにしたいとねがう
きみを永遠のものにしたいとねがう、その度に
笛を、馬頭琴（ホーリ）を奏でる才のないことを嘆く

僕だけがきみを知っているからこそ　そうおもうんだ
描く筆なしに
奏でる楽器なしに
どうしてきみを永遠のものにすることができるだろう

書くことでは足りない。だって詩ならば
僕らにとって　それは
ただの会話なのだから

G.アヨルザナ

2001.8.12-24　詩集『哲学の詩たち』より

「生まれて初めて酔った女性あるいは
“アヨールとウルズィー”という名のダイアローグ」

— 独りぼっちの神さまには伴侶がいるわ
それはわたし
— 頭おかしくなっちまったかい？
— わたし、光をみているの

— 神さまってきっと男のひとよ
そしてわたしは女
— はやいとこ医者呼んだ方がいいぞ
— わたし、道をみているの

— 風がやんだ？
わたしのこと、呼んでるんだよ
— かわいいお前、一体どうしちまったんだい？
— 太陽って無色なんだね

— わたしのこと、永遠に忘れてください
わたし、もう、行かなきゃ
— 僕の希望よ、愛するひとよ・・・
— もう一杯ちょうだいな・・・

L.ウルズィートゥグス
詩集『自由であるための芸術あるいは新しい本』より

「無題」

いつの日かきみの口から
こぼれるやもとおそれる一言のように
その首すじからするりと解かれるきみの
首飾りははかなく　眼差しはまどいがちで

仏を納め封印した柩のような
かりそめのこの身体の内には
誰しもに与えられた運命とまるで違うところもない
焦がれる想い　嫉妬の苦しみ

嫉妬の苦しみ　嫉妬の苦しみ
嫉妬の苦しみ　嫉妬の苦しみ
自分が皆となんら変わりはしないと思い知らされることの
嫉妬にまさる苦しみ

G.アヨルザナ
1998.7-1999.10.31　詩集『哲学の詩たち』より

「無題」

私は真っ青な色彩(いろ)
私は 点(ピリオド)、点(ピリオド)、点(ピリオド)だというのに
雲よりもさらに雲、水よりもさらに水。決してとらわれはしないのに
風の絵姿、鳥の飛翔、凍てつく真冬の吹雪だというのに
私は無辺際。愛の実体そのものであるというのに
この身に全世界を、瞳には天涯を満たしているというのに
時が何処に存在するかを、ただひとり解きあかしたというのに
雪の結晶、そのひとひらずつを名付けることだって出来るのに
この驚嘆すべき、深淵なる人生の神秘のまえに微塵も懼(おそ)れはしないのに
熱い炎に手を差し出すことになんのためらいもないのに
ただ、貴方の前では
燃えさかる勢いも失くし、いたずらに光り澱(よど)ませ
その掌の中ののばらのように
　ことばなくひそやかに　俯いてしまうだけなんて ―

L.ウルズィートゥグス
2003.10.4　詩集『孤独のレッスン』より

「無題」

静寂と光あふれる碧落（へきらく）の天の下
あなたの腕の中で　息絶えたい
ただあなたの腕の中で　わたしは息絶えてしまいたい
無言のまま彼方をみつめる樹の下・・・

わたしたちのそばには人生を呼ぶ雲もなく
それから、そう
溜息をつく風もない
最期の瞬間　慟哭の声響かす鳥たちの姿もない
ああ、いいね　とても静かだね・・・

その時あなたがなにも纏っていなければいい
そうしてそっと微笑んでいるといい
いつだって私を夢中にさせた
その尊大なさまはそのままに・・・
わたしの髪をなでる掌が震えてなどいなければいい

静寂と光あふれる真青な天の下
あなたの腕の中で　息絶えたい
ただあなたの腕の中で　わたしは息絶えてしまいたい
無言のまま彼方をみつめる樹の下

彼方をみつめる樹の下、あなたの腕に抱かれて
わたしは生涯を　なんの哀しみもなくそこに残して逝こう
その胸にいつまでも響き続ける
たった一言をあなたに訊こう
《わたしのこと、本当に愛してた？》

L.ウルズィートゥグス
1999　詩集『天上の樹々』より

「無題」

一番お気に入りの緑のネクタイが
絞首台のロープになる夢をみた
死ぬ間際、奇妙に甘い味を感じて
目が覚めた

近頃僕はネクタイを締めていない
この世の枠を外れて生きている
忘れられない、悶えるようなあの甘美な味は
昨日息子の指についたチョコレートを舐めたときのもの

こんな風に、すべての道理は明らかだ
そして目覚めた朝に感じるのは、きみの香り
ああ、この香りはもう僕の一部となった
何らかの死から
十年の間、きみの横で僕は息を吹き返し続けている

G.アヨルザナ
2005.2.25　詩集『Non Plus Ultra』より

「あいしてる」

―　波打つきみの黒髪　幾本あるだろう
　　その数だけ　きみを愛してる
　　足元にひろがる砂は　いったい幾粒？
　　その数だけ　きみを愛してる
　　夜ごときらめく無数の星　ふりしきる雨のしずく
　　ああ、その数ほどに　ぼくはきみを愛している　―
ふたりのはじまりの夜
あなたはそう呟いた

それから後の十年間、わたしは髪をかぞえつづけた
それから後の十年間、砂の粒をかぞえて過ごした
めぐる春、そして秋
あらゆる水滴を選りわけて　ひねもす数えくらした
それでもとうとうわからなかったよ
あなたの愛がどれだけなのか・・・

この世の果てしなさを測る　蟻のように一途なわたし
まるでうたがうことしらぬ　寺院の鳩のようなわたし
うえを見あげしたを見やり　ひたすら指おり明け暮らすあいだ
傍らにいるはずのあなたが
本当にいたのかどうかさえ、気付かなかった
この世で誰より頑是なく　夢見がちなわたしときたら
さだめによってめぐりあったはずのあなたに
想いを告げることすらできないままでいた

わたしは　あなたを　あいしています
こころから　あいしています
この身に鼓動する心臓のごとく
ただひとつだけの　愛なのです

L.ウルズィートゥグス
2005.11.26　詩集『私の哀しみの歴史』より

作者紹介：

グンアージャビーン・アヨルザナ / Gun-Aajaviin AYURZANA

1970年生まれ。モンゴル国バヤンホンゴル県出身。
詩集に『時の瞬く間に』、『哲学の詩たち』、『Non Plus Ultra』等、長編小説に『シャーマン伝説』、『シュグデン』、『白、黒、赤』等がある。他に翻訳書、文芸評論など著書多数。2002年に「金の羽」杯、2003年モンゴル作家同盟賞、2009年モンゴル文化功労者。

ロブサンドルジーン・ウルズィートゥグス / Luvsandorjiin ÖLZIITÖGS

1972年生まれ。モンゴル国ダルハン市出身。
詩集に『序章』、『天上の樹々』、『孤独のレッスン』、『私の哀しみの歴史』等。短編集に『眼鏡に残った写し絵たち』、『都会のお伽話』、エッセイ集に『見ることの果て』等。2002年、モンゴル作家同盟賞、「金の羽」杯を受賞。2009年に北極星勲章を叙勲。

参考文献：

G.Ayurzana（1998）, *Tsag khugatsaa amshiih zuur*, Ulaanbaatar, p.71.
G.Ayurzana（2001）, *Philosophy-iin shülgüüd*, Ulaanbaatar, p.3, p.50.
G.Ayurzana（2005）, *Non Plus Ultra*, Ulaanbaatar, p.30.

L. Ölziitögs（1998）, *Tengert urgadag modod*, Ulaanbaatar, p.18, p.81.
L. Ölziitögs（2002）, *Erkh chölöötei baikhiin urlag buyu shine nom*, Ulaanbaatar, p.133.
L. Ölziitögs（2004）, *Gantsaardaliin dasgal*, Ulaanbaatar, p.29.
L. Ölziitögs（2009）, *Minii gunigiin tüükh*, Ulaanbaatar, p.63.